

エペソ人への手紙2章14-16節 「十字架による平和」

1A ユダヤ人にあった隔ての壁

2A 二つを一つにされた方

1B 交わりにある平和

2B 非ユダヤ人の信仰

3A 十字架が滅ぼした敵意

1B 人を隔てる様々な規定

1C 偽りの平和

2C 自分という城

2B 律法に違反するユダヤ人

1C 誇りながら破る矛盾

2C 持っている者に対する罪科

3B 罪の下にある両者

4A 十字架による和解

1B 血による宥めの供え物

2B 御霊による新しい人

3B 一人の人

本文

エペソ人への手紙2章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは2章前半まで来ました。午後に、一節ずつ、11節から見ていきたいと思います。今朝は14-16節に注目します。「¹⁴ 実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、¹⁵ 様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、¹⁶ 二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」

1A ユダヤ人にあった隔ての壁

私たちは、エペソ書を学ぶ前に、ガラテヤ書を学びましたが、そこでユダヤ人たちが、自分たちの民族に誇りを持っていることを見ていました。神はユダヤ人に救いを約束しておられるので、異邦人の男性は割礼を受けて、ユダヤ教に改宗しなければならないとしていました。

その肉の誇りは、教会が始まってからも続いているのを、私たちは使徒の働きで見るようになります。それは、ペテロが、ヤッファで夢を見た時のことです。そこには、汚れているとされる動物がいる大きな敷布があり、「屠って食べなさい。」との天の声が聞こえました。ペテロは、そんなことは

できない、まだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことがないと言いました。すると、「神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない。」との声がありました(10:15)。

そして、このことの意味は、ペテロのいたシモンの家に、カイサリアの百人隊長コリネリウスから遣わされた兵士たちがやってきたことによって知ります。これは、異邦人の家に入るということを意味していました。ユダヤ人は、異邦人の家に入ることはまずなかったのです。けれども、ペテロは主の啓示に逆らうことなく中に入り、福音を伝えると、なんと聖霊がコリネリオ一家に注がれ、彼らが信仰によって清められたことを知ったのです。このことが、エルサレムに伝わりました。ペテロが戻ってきたら、ユダヤ人の信者たちが彼を非難して、「11:3『あなたは割礼を受けていない者たちのところに行って、彼らと一緒に食事をした』と言った。」とあります。イエスを信じている者たちでさえ、ユダヤ人には異邦人と付き合い合わないという壁を作っていたことが分かります。

けれども、こんなことは、私たちの間でもありえますよね？キリスト者の証しをするために、ある人々といっしょにいて、その人々のことを受け入れがたい人々であれば、「あなたは、クリスチャンなのに、なぜあんな人たちといっしょにいるのか？」と非難することがあるかもしれません。自分がその行いをしたいと願っていっしょにいるのならば、それは世を愛していることになりませんが、そうではなく、キリストの愛を伝えるために、その人々というのであれば、それは列記とした宣教です。それなのに、あの人たちといっしょにいたら、他の人たちから、特に仲間のクリスチャンたちからなんと思われるか分からないとして、付き合い合わないようにしているかもしれません。

けれども、それがまさに、アンティオキアの教会で起こって、ペテロは、パウロから公然と抗議されたことがあります。福音の真理にまっすぐ歩んでいないとして、パウロはペテロを抗議しました。異邦人信者とユダヤ人信者が食事をしていたのですが、エルサレムから割礼を信じている者たちがやってきました。それでペテロが、その場から離れていきました。そして他のユダヤ人たちも離れていきました。おそらく、あからさまではなく、何となく別の理由があったかのように引き下がったのではないかと想像します。そのことをすぐにパウロが察知して、皆の面前でペテロに、福音の真理に向かってまっすぐ歩いていないことを指摘したのです。(ガラテヤ 3:11-21 参照)

福音を信じているから、付き合いえないといけないと分かっているのに、他の人たちからどう見られるか？と思って距離を取っているということは、ないでしょうか？これは、私たちが自分たちで作りだしている壁があって、その壁の中にいることによって排除されないでいる、そこにいれば安全であるというものがあります。これを壊すために来られたのが、平和の君、キリストです。

2A 二つを一つにされた方

1B 交わりにある平和

14 節に、「キリストこそ私たちの平和です」とあります。私たちは、平和という言葉を聞くと、争い

のない状態を指していると思います。けれども、続けてパウロは、「**キリストは私たち二つのものを一つにし**」と言っています。この二つは、ユダヤ人と異邦人です。ユダヤ人と異邦人が、キリストにあって交わり、食事をするというようなことをここで話しています。そこにある喜びは、ひとしおです。胸襟を開くというのでしょうか、そこにある平安は、心から互いを喜び、祝福し、楽しみ、癒されます。

イスラエル人が神に献げるいけにえとして、神の定めているものに、「交わりのいけにえ」があります。レビ記 3 章に出できます。このいけにえは、平和のいけにえとも訳せるし、和解のいけにえとも訳せます。牛や羊の脂身は、祭壇の上で焼きます。これらは主の食物になると書かれています。その他の肉は、献げる者が食べます。このようにして、主と共に食事をします。主と自分が同じものを食べて、また互いに主において同じものを食べて、それで交わるのです。ちょうど、私たちがイエス様の名前で祈り、ともにバーベキューを食べて楽しんだらどうでしょうか？とても、喜ばしい時、うれしい時になりますね。これが、ここで話している平和です。

2B 非ユダヤ人の信仰

イエス様は、ユダヤ人の中で宣教の働きを行われている時に、すでに異邦人もその信仰によって受け入れられていました。百人隊長は、しもべが中風にかかって苦しんでいましたが、イエス様がそこに行って治そうとしたら、「あなたさまを屋根の下にお入れする資格はありません。ただ、おことばをください。」と言いました。イエス様は、「まことに、あなたがたに言います。わたしはイスラエルのうちのだれにも、これほどの信仰を見たことがありません。」と言われました(マタ 8:10)。

そしてサマリアの女は、驚くべきことです。彼女のほうが、水をお願いするイエス様に対して、疑い深くなっていました。ユダヤ人とサマリア人は付き合わないからです。けれども、イエス様は、ご自身がメシアであることを、はっきり彼女に明かされ、彼女はキリストを知りました。同じようにして、イエス様は、十人のツアラアトにかかった患者(らい病人)を癒やされましたが、戻って来て礼拝したのは、たった一人で、しかもサマリア人でした。そして、良きサマリア人の話があります。

そして、カナン人の女は娘が悪霊につかれていました。イエス様は、初め、彼女を拒むようなことを言われました。「イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」けれども女は、「主よ、そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます。」と答えました。イエス様は、「女の方、あなたの信仰は立派です。あなたの願うとおりになるように。」と言われました。(マタイ 15:21-28)このようにして、サマリア人に対しても、異邦人に対しても、イエス様はその信仰によって救っておられます。キリストこそ私たちの平和なのです。

3A 十字架が滅ぼした敵意

その平和を決定的にしてくださったのが、十字架であります。十字架に磔にされている時に、大

きな出来事が起こりました。「マタ 27:51 神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。」とあります。上、つまり天から、神から、幕が裂けたということです。この幕は、大祭司が年に一度、血を携えて、契約の箱、そして宥めの蓋のところで血を振りかけて、イスラエルの罪の清め、贖いをする、至聖所と、聖所を区切る垂れ幕です。それが裂けたのです。こうやって、神と人との間にある罪が取り除かれ、人が神に大胆に近づくことができるようになったことを示していました。この十字架の御業によって、神が私たちと和解されただけでなく、私たちがキリストにあって平和を持つのです。

1B 人を隔てる様々な規定

1C 偽りの平和

先ほども話しましたように、私たちはこれが平和だと思っていることで、実は平和ではないことがあります。エレミヤの時代も、神殿でいけにえを献げているから平和だと人々が言って、祭司や預言者でさえ平和だと言っていました。「エレ 8:11 彼らは、わたしの民の傷を簡単に手当てし、平安がないのに、『平安だ、平安だ』と言っている。」罪を犯しているのに、表面的に繕って、「大丈夫だよ」と祭司や預言者が言っていることを、深い傷を負っているのに表面だけ手当てしている姿にならぞらえているのです。イエス様も、そうした平安や平和に対して、「マタ 10:34 わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っははいけません。わたしは、平和ではなく剣をもたらすために来ました。」と言われました。

2C 自分という城

パウロは、本文 14-15 節で、「**ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、¹⁵ 様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。**」と言われました。主の命令を守っているようで、実は、自分自身を守るために戒めを利用していることが多々あります。自分自身がそれを守っているような体裁を取れるように、解釈をしています。自分自身が正しい、義とみなされるようにすることです。例えば、心の中で情欲を抱いていても、姦淫の罪は犯していないと自負します。また、他の女に引かれて、妻と離縁して、その女と結婚しても、「離縁状を出す」というモーセの律法を取り上げて、自分は正しいとします。そうやって、自分の欲望はしっかり残しながら、それでもって規則で自分の身を固めることができるのです。自分の罪を捨てることなく、自分が正しいとみなすことができます。そういうことをすると、確実に、神との関係の間に壁を作っています。形式的には規則を守っていますが、神の目には忌み嫌われたものとなるのです。そして、そのようなことをしていれば、周りの人々との間にも壁を作っているのです。自分が心に城を作っていて、「寄らば斬るぞ」みたいな壁を作っているのですから、相手は近づきようがありません。

そして、いろいろな規則や規定があると、「私たちはこれ、あなたがたがあれですね」という壁を作りやすくなります。自分たちがいて、相手がいて、そこには壁があり、敵対関係ができます。内と外を造るのです。「私たちと、あなたたち」という分離壁を造ってしまいます。そして互いに、相手に近づくことを恐れます。自分が否定されるのではないか？という恐れがありますから、相手側に行

こうしません。お互いに肯定し合って、仲間意識を造りますが、その外には自分たちが共通に嫌がっているものがあって、それを語り続けることで、自分たちを守ろうとするのです。こうやって、互いが自分たちの殻に閉じこもるのです。

2B 律法に違反するユダヤ人

1C 誇りながら破る矛盾

それでは、実際に律法を持っているユダヤ人たちの課題を考えてみましょう。彼らは道徳的には、明かに神から離れて、偶像に仕えている異邦人より、正しく生きていました。相手の行っている罪はあまりにも明らかなので、他者をさばくことで自分自身の罪を見なくても済んでいました。ところが、これが大きな問題です。自分自身も、少し状況を変えたら同じことをしていることが見えなくなっています。

そして、律法を持っているユダヤ人の問題は、「持っている」だけで行わないことです。持っていることが、自分がそれを行っていると勘違いしてしまうことです。聖書を知っているから、聖書を実践していると思ってしまう。けれども、知っていることと、行っていることは大きな違いがあります。私たちキリスト者もそうですね。聖書を知っているので、そこに書かれていることを自分は守り行っていると勘違いしてしまいます。知っていることは、そのまま行っていることとは限りません。でも、どうしても、持っていること、知っていることで、自分が実際に行っていることが見えなくなってしまうことがあるのです。

2C 持っている者に対する罪科

そこでパウロは、同胞のユダヤ人が律法は教えていても、それを行っていないという矛盾をローマ 2 章で論じた上で、律法の下にいる者たちが、律法を持っていない人たちと同じように罪を犯していることを話しています。「ロマ 3:10-12 次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。一人もいない。11 悟る者はいない。神を求める者はいない。12 すべての者が離れて行き、だれもかれも無用の者となった。善を行う者はいない。だれ一人いない。」そして、その罪深い姿を、旧約聖書から引用していきますが、最後にこう言っています。「3:19 私たちは知っています。律法が言うことはみな、律法の下にある者たちに対して語られているのです。」

3B 罪の下にある両者

ですから、ユダヤ人のように律法を持っている人たちであっても、全く律法から離れて度外視している人たちと同じように、罪の下にいて、神の裁きに服さなければいけないのです。そして、福音の真理は、罪が隠れてしまっている人々こそが、神に救われるのが難しくなっています。明らかな人も、隠れている人も同じように罪深いのですが、隠れている人は隠れているので、自分が罪人であることが認めにくいのです。それで、自分に壁を作り、そこに安住してしまいます。

しかし、すべての人が神の前で裁きに服さないといけません。「ロマ 3:20b すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服することになるのです。」そこには差別がないのです。ここからが実は、平和の入口なのです。ユダヤ人であっても、異邦人であっても、道徳的な人であっても、不道徳な人であっても、どんな人であっても、神の前に出たら、自分のしたことに対して申し開きをしなければいけないのです。神にはえこひいきがありません。ここに、隔ての壁はなくなっています。壁は壊されています。自分を正しくしようとする壁、自分を守るための壁が壊れています。

4A 十字架による和解

1B 血による宥めの供え物

そこでパウロは、十字架による神の和解を説いているのです。すべての人が神の裁きに服しているのなら、その罪を赦すために流されたキリストの血も、すべての人のためのものです。「ロマ 3:23-24 すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、24 神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。」どんな人であっても、神の恵みにより救われます。キリスト・イエスの贖い、つまり血を流して対価を支払われて、私たちは神のものとして贖われるのです。そこには、差別はありません。全く同じようにして、救われます。それが16 節に書いてある、十字架によって敵意が廃棄されたということです。「**二つのものを一つのから**だとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」

私たちは覚えましょう、自分が受け入れられない人がいて、けれども教会に来ました。「あの人は、とても変だ」と思ったとします。けれども、福音は基本的にこう言っているのです。「お前も変だろ！」あの人が変だと思っても、自分も神の前では変なのです！そして、その変な者たちを、神は恵みによって救ってくださったのです！自分自身に何らよいものがないけれども、私たちは互いに救われた者同士で、そこにあって完全な一致があります。

2B 御霊による新しい人

私たちは、全く新しい自分を見ます。新しい自分を見ます。「Ⅱコリ 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」御霊によって新しく生まれて、新しい人になりました。そこにおいては、みなキリストにあって同じで、一つになっているのです。それが、本文で語っていることです。「**こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現**」したということです。自分がユダヤ人の前にキリストにある新しい人なのだ。異邦人である前に、キリストにある新しい人なのだ。今までは、自分をユダヤ人とかギリシア人とか、そういった民族の違いで自分を知っていた。けれども、そうではなくキリストにある新しい人で自分を見ているのです。

3B 一人の人

私たちには、いろいろな社会的な壁があります。今、言いましたように、国民の違いがあります。

男女の違いがあります。年齢の違いがあります。経済格差もあります。しかし、それらの違いは、キリストにあって一つになっているということの前では、消え去ってしまいます。自分が同じ日本人でも、御霊によって新しくされている、例えば韓国人がいたら、御霊によって新しくされている韓国人と自分のほうが、同じ人になっているのです。

天においては、あらゆる国から、あらゆる民族から、あらゆる言語から、キリストの流された血によって贖われた民が、一つ声となって主を賛美しています(黙示5章参照)。この天の喜びを、少しでも味わえるのは、他の言語の人たちと同じ賛美を歌うことです。例えば、世界中のクリスチャンが、50カ国で、「驚くばかりの(アメージング・グレイス)」を歌っている動画がユーチューブであがっています。¹

アメリカのニューヨークから始まっています。次に中国の武漢から。それからスペイン、次にイタリア。インドネシアに飛びます、手を合わせながら女性たちが歌っています。それからベルギーに、アイルランド、ギリシア、イラン、インド、ケニア。ケニアの女性は民族衣装で着飾っていますね。それから日本です！松島から歌っています。バツアツという、南太平洋に浮かぶ島の国から。次にノルウェー、それからトルコ。イスラム教の国ですが、クリスチャンが歌っています。そしてイギリス。モザンビーク、ブラジル、ミャンマー、デンマーク、ウガンダ。ウガンダは子供たちが歌っています。カンボジア、ネパール、そしてニュージーランド、そしてオーストラリアです！ニュージーランドとオーストラリアは先住民のクリスチャンが歌っています。そして、アルゼンチン、スイス、そして中東のレバノン、メキシコ、リトアニア、アラブ首長国連邦、ドイツ、タイ、南アフリカ、チリ、フィリピン、フランス、サモア、ドミニコ共和国、ロシア、モーリシャス共和国です。東アフリカの、インド洋に浮かぶ島国です。スリランカ、オーストリア、ポーランド、ジンバブエ。エジプト、イスラエル。アラブ人とユダヤ人が並んで歌っていました。次はザンビア、飛んでカナダ。パプア・ニューギニアです。

すごいですね、でもこれ、まだ50カ国ですね。そして最後に、それぞれがイエス様によって救われたこと、イエス様の名を呼び求めている姿が次々と出てきます。みな、同じイエス様の流された血によって、神と和解していただいた、喜びの魂で終わっています。他にも動画ありますよ、「祝福(The Blessing)」という、アロンの祝祷を歌っているものは、なんと257か国語で、154カ国の兄弟姉妹が歌っている動画もあります！！²天国の前味です！

これが、一人の人なのです。キリストこそその平和なのです。背景はみな違います、それぞれ対立して、敵対してさえいます。けれども、私たちはそれらの上にいるのです。キリストにある平和が実現しているところです。ばらばらになって、孤独になっていく今の時代。キリストにあって、人々はどんどん一つにされて行きます！神の救いは、このように世の流れと逆行するのです！

¹ <https://youtu.be/BA7pdABvpnc>

² <https://youtu.be/d48-qbcovVY>